HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アイヌ語樺太西海岸南部方言テキスト(1) : 「カワウソのばけもの」
Author(s)	阪口, 諒
Citation	北方言語研究, 9, 131-144
Issue Date	2019-03-15
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/73720
Type	bulletin (article)
File Information	08_sakaguchi.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北方言語研究 9: 131-144（日本北方言語学会 2019）

［資料・研究ノート］

アイヌ語樺太西海岸南部方言テキスト (1) ―「カワウソのばけもの」―

阪口　諒
（千葉大学大学院人文公共学府博士前期課程）

キーワード：樺太アイヌ、知里真志保フィールドノート、樺太西海岸南部、チャラハウ

1. はじめに

知里真志保（1909~1961）の遺稿ノートを翻刻した北海道教育庁生涯学習部文化課編(2002)（以下、【フィールド 1】）には樺太アイヌ[1]の物語が複数掲載されている。そのうちいくつかはすでに和訳が公刊されているが、どの和訳と対応するのか分からないものもあり、遺稿ノートの忠実な翻刻のままでは利用しにくい。今回、【フィールド 1】45~47 頁に掲載の「Esaman Carahau」が既に「カワウソのばけもの」（一つ目の大入道）として公刊されていることが確認できた。また、いくつかの資料から語り手に関しても特定できるように思われる。この物語は「樺太西海岸タラントマリの伝承」であるが、樺太（サハリン）西海岸の散文物語で原文が公開されているものは極めて少ないことを考慮して、原文に新たな訳註を付すことにした。なお、この物語の原文はローマ字で筆記されている。

2. 物語のジャンルについて

この物語はチャラハウに属する。知里（1973 [1944]:344）ではチャラハウを「どこそこでかういふ珍しい話があったさうだ、といった類の、日常炉辺でする雑話体の噂話で、これには一定した伝承形式も無く、その言語も日常生活そのままの平易な語である。西海岸の語である」としている。知里（1955:172-173）では少し説明が変わり、「もと『噂』『噂話』『世間話』『よもやまばなし』の意味であるが、樺太西海岸の中南部では自然に一種の型ある話として傳えられている。(東海岸シラウラでは説話一般の意味にこの語を用いる。)」と解説している[2]。また、知里（1955:208-211）には「うわさばなし」が 4 話掲載されているが、すべて「樺太西海岸タラントマリの傳承」とある。なお、本稿で紹介する話はそのうちの②である。それぞれの「うわさばなし」の情報を以下に簡単に整理しておく（タイ

[1] 本稿では日本・ロシア領になる以前から樺太（サハリン）に居住し、1945 年頃までこの地域で暮らしていた人々とその子孫に対する呼称として樺太アイヌを用いる。後述する山田ハヨ氏のように、樺太が日露雑居の地からロシア領になる際に北海道へ移住させられたいわゆる対雁アイヌも、日露戦争後までにほとんど全員が樺太に帰還している。しかし 1945 年以降は、樺太が日本領だった時代の影響を受けて、樺太アイヌのほとんどが北海道以南に移住している。

[2] 知里（1973 [1944]）の配列はジャンルによっているが、ジャンルがどこで区切れるのかは明確ではない。第 36 話～第 42 話は怪談であり「噂話」（チャラハウ）の可能性がある（第 41,42 話は次頁の④,①）。知里（1955）はチャラハウを西海岸南部の一定の形式をもった話に限定しているため、「うわさばなし」として多蘭泊のものだけが掲載されているのだと思われる。なお、真岡出身の話者が語った物語に「carahaw nee manu, tuytah nee manu（carahaw だよ、tuytah（註―挿入歌をもつ昔話）だよ）」で語り終わるものがある〔丹菊 2001:73〕ので チャラハウは「型ある話」というよりは知里（1973 [1944]）の説明の方が合うように思われる。

トルは知里 1955 による)。知里氏の発表した報告を確認したが、アイヌ語原文が掲載されているものは見当たらない。

①「うわさばなし（その一）―死出のお出迎え―」〔知里 1955:208〕
・「樺太アイヌの説話（一)」「42．死出のお出迎（リヤコタンにあつた話)」(昭和 16 年 12 月、多蘭泊、佐々木ムラロ述)〔知里 1973 [1944]:334〕
・「(噂話）死人のお出迎え―リヤコタンにあつた話」採集の時、所―昭和 16 年 11 月、タラントマリにて／傳承者―マオカ出身、佐々木むら（50）／採集並に訳註―知里眞志保」〔知里 1953:229〕。　※二つの採録時期が一致していない。

②「うわさばなし（その二）―カワウソのばけもの―」〔知里 1955:209〕
・「14．一つ目の大入道」〔知里 1973 [1961]:385〕
【フィールド 1】45~47 頁に原文。採録日は昭和 18 年 5 月 22 日。

③「うわさばなし（その三）―フクローに助けられた娘たち―」〔知里 1955:209-210〕
・『えぞおばけ列伝』「17．フクローとおばけ」〔知里 1973 [1961]:390〕
【フィールド 1】47~50 頁に原文。採録日は②と同じく昭和 18 年 5 月 22 日。

④「うわさばなし（その四）―戸を欲しがるおばけ―」〔知里 1955:210-211〕
・「樺太アイヌの説話（一)」「41．戸を欲しがる魔物」(物語末尾に「昭和 16 年 12 月、多蘭泊、佐々木ムラロ述」とある)〔知里 1973 [1944]:333-334〕
・『えぞおばけ列伝』「11．戸を欲しがるおばけ」〔知里 1973 [1961]:383〕

3．語り手について

「カワウソのばけもの」「フクローに助けられた娘たち」の二つは、同じ人物によって筆録されたものかは分からないが、原文のタイトル横に「18 22/5」(昭和 18(1943)年 5 月 22 日）と記載があるので同じ人物によって語られたものである可能性が高い。

北原（2009:49）には、知里眞志保遺稿ノート No.10（【フィールド 1】に翻刻されているものは No.2 で、これとは別のノート）に掲載されている 5 つの物語の名前が挙げられているが、その中に「Esaman Carahau 18 年 5 月 22 日 山田ナヨ」という文字が見える。これは【フィールド 1】に掲載されているものと全く同じタイトルである。知里眞志保遺稿ノート No.10 は佐々木弘太郎氏（1923~1965）から知里氏へ送られた資料だと考えられるので、知里氏は佐々木氏が筆録した資料をもとに和訳を行ったのだと思われる。知里（1973 [1944,1953]）には樺太アイヌの物語が掲載されているが、そのうちのいくつかは佐々木氏や和田文治郎氏（1898~1958）が筆録したものだと記されている。本話も佐々木氏が筆録したものと推測される。

ここで語り手の山田ナヨ氏とは誰なのかという問題が出てくる。知里（1973 [1944]:284-287）には「13．海猫娘をさらふ」という物語が掲載されているが、この物語の

語り手は「白主[3]出身、山田某女」で、「友人佐々木弘太郎君が筆録してくれたローマ字書きの原文から私が訳出したもの」〔知里 1973 [1944]:287〕だという。さらに知里（1973:454）から、この語り手は「山田ナヨ。石狩アイヌ、富沢ノースケの娘」（これは知里の旧蔵本による）だということが分かる。ただ、この記述は知里（1955）にある「タラントマリ」という記述と合致していない。

樺太西海岸多蘭泊に住んでいたことのある語り手に山田ハヨ氏がいる。山田ハヨ氏が語った語彙・口頭文芸は、田村すず子氏のノートの翻刻である北原(編)（2003）に収録されている。北原(編)（2003:171-172）によれば、山田ハヨ氏からアイヌ語を調査・記録した田村すず子氏のノートには、山田ハヨ氏は石狩で育ち、のちに多蘭泊に移住したとあるが、出生地は書かれていないとのことである。先ほどの山田ナヨ氏は「石狩アイヌ」と記載されていたが、「石狩アイヌ」は、樺太から宗谷、さらに対雁に移住させられ、のちに石狩に移っていった、いわゆる「対雁アイヌ」のことを指すと考えられるので、山田ハヨ氏の経歴とも一致する。また田村すず子氏は、知里氏が用意した紹介状を持ち豊富町の役場へ行ったところ、山田ハヨ氏を紹介されたとのことだが、知里氏がそれ以前に山田氏を知っていたのだとすれば、紹介状に山田氏のことが書かれていても不思議ではなく、田村氏が山田氏のもとを訪れたことも納得できる。

4. 語彙的な特徴について

山田ナヨ氏と山田ハヨ氏は確実に同一人物だと言えるわけではない。記述されたアイヌ語も、語彙調査によるものと物語によるものとの相違からか、完全に一致すると言うことは難しい。ただ、本話と北原(編)（2003）に掲載されているアイヌ語を比べた際、男を意味する言葉が両方とも okkaw だということは注目に値する[4]。そのほか全部・全体を表す言葉として本話では imiki が、北原(編)（2003:187）では emike が用いられている。以下では、この二つの語彙を取り上げてアイヌ語の方言区分に関して若干の考察を加える。

服部・知里（1960）に掲載されている基礎語彙 200 語を見ても、「男」を意味する語として okkaw があげられているのは多蘭泊だけである。落帆、真岡、白浦、ライチシカ、内路では ohkayo である。また、同じ基礎語彙 200 語によれば、「みんな」を意味する語彙として、多蘭泊・真岡でのみ imiki という語形が用いられている（本稿のテキストでも同様である）。

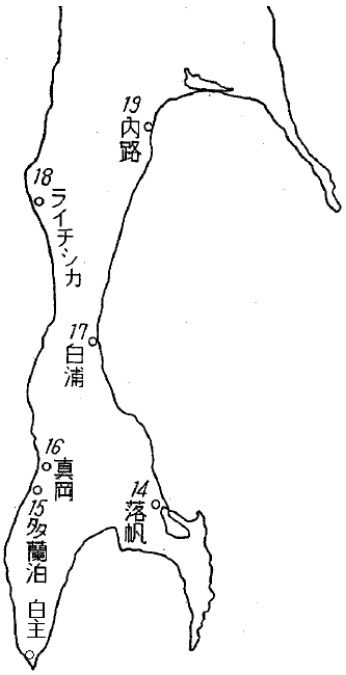

図 1. 服部・知里(1960)調査地点＋白主
服部・知里(1960:33)に書込したもの

[3] 【人間編】には「 “re moroaxpo uruwax nee manu. ieruy kianne ay-sapo nampe nina. ponuyne ay-sapo nampe eha ta. onuman usapaxte. sine aynu suke. sine aynu waxka ta”.『三人の娘が姉妹でありました。いちばん年上の私の姉さんわ焚木をとりました。年下の私の姉さんわオニクを掘りました。夕方に一同連れてだって帰って来ました。ひとりが炊事をしました。ひとりが水を汲みました』《シラヌシ昔話》」〔【人間編】505〕とあるが、これは「13. 海猫娘をさらふ」の冒頭の原文と考えて差し支えないように思われる。

[4] これは同じ話者であることは必ずしも意味しないが、西海岸南部の人であることの根拠となる。なお、山田ハヨ氏は「男」を意味する語として okkaw だけでなく、okkayo もあげている。

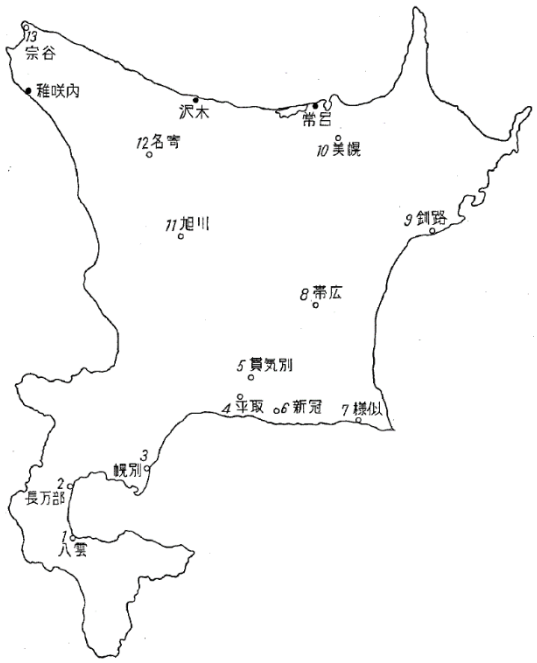

図 2. 服部･知里(1960)調査地点（北海道）
服部･知里(1960:33)より

【人間編】では、ohkaw「男」〔【人間編】466,602〕、keyanne-ohkao「長男」〔【人間編】497, 503〕が白主・真岡の言葉として掲載されているので、ok(~h)kaw, ohkao は西海岸南部で広く使われていた可能性が高い[5]。服部・知里（1960）のその他の調査地点では okkayo（八雲・長万部・幌別･平取・貫気別・新冠・旭川・名寄・宗谷）、ohkayo（落帆・真岡・白浦・ライチシカ・内路）、okkay（様似・帯広）となっているので、全て共通する語根を持つと言える。分布の広さからは okkayo が元々あった語形[6]だと考えられる（ohkayo は樺太方言において音節末/-k/が規則的に/-h/に変化した語形である）。ok(~h)kaw に関しても、okkay からではなく okkayo→okkao[7]→okkaw[8] のように発展した語形である可能性がある。なお、ok(~h)kaw の所属形[9]は ohkaw-he[10]〔【人間編】466〕だが、ohkao に関しても所属形が同様の形態をとるのかは不明である。

次に imiki~emike に関して扱う。服部・知里（1960）で「みんな（来た）」というときの「みんな」は、多蘭泊・真岡においてのみ imiki という語形が用いられている（本稿のテキストでも同様である）。他の樺太 5 地点では emuyke という語形である。山田ハヨ氏の記録には「ne:rampe nakka emíke ewánte he. 何でもわかってますか」、「emíke auwánte みんな わかってます」〔2 例とも北原(編)2003:187 より〕とあり、「みんな」という意味では emike という語形を用いている。東海岸の民話を集めた【研究資料】には emuyke という語形しか見出せない。また、【物語】本文に対する語彙集である金田一（1913:36）には「emuike, 〔副〕ミナ、コトゴトク、スベテ、全ク、全部」とある。【物語】本文では emuyke という例と共に emiike〔【物語】79〕が 1 例のみ確認できる（emuyke は 70 例出現する）。

---

[5] 【フィールド 1】に掲載の多蘭泊で採録されたテキストでも ohkau〔31〕、okkau〔52〕が確認できる。
[6] 知里（1975 [1954]:466）では、okkayo が本来 okkay の第三人称所属形（所属形とは、基本形である概念形に対して他の物・人と密接な関係があることを表示する形式）だったとされている。その推測が正しい場合、okkayo, ohkayo が北海道・樺太の大部分で確認できることから、樺太･北海道方言が分岐する以前に okkay から okkayo が生まれ、それが概念形として用いられることになった蓋然性が高い。
[7] こうした変化は、北海道においても観察される。例えば、「太い」は ruwe（八雲・沙流・美幌・旭川・名寄）、ruye（幌別・帯広）だが、宗谷では ru'e とされる〔【方言辞典】270〕。
[8] アイヌ語の /u/（/-w/もほぼ同様の発音だが、音韻論的には子音に属する）は円唇性が強いため、/o/ に変化しやすいと思われる。また、藤山(口述)･村崎(編)（2010:94）でも ohkayo-poo「男の・子」と言う直前に、ohkaw-poo「男の・子」と言っており、ohkayo と ohkaw が入れ替わる可能性を示している。
知里氏がわざわざ ohkaw と ohkao を書き分けているのは興味深いが、知里（1973 [1942]:525）に従えば、okkao の場合、okkao-ho が所属形として期待される。しかし、その語形を筆者は確認できていない。
[9] 所属形は、対象をある特定の人・物に密接に関係したものとして表現するときに用いる。
[10] 知里（1973 [1942]:527）は、aw「舌」、inaw「木幣」、usiw「下僕」、kew「屍」、cinkew「親」のように概念形が-w で終わる語彙には、所属形形成接尾辞-he が規則的に付加されるとしている。

樺太の多蘭泊・真岡で確認される imiki「みんな」、北原(編)（2003:183）の emike は、樺太の他の地点の emuyke と音が近いことからも emuyke とは語源を同じくすると推測される（北海道では emuyke と語源を同じくする語彙は見当たらない）。emuyke が用いられている地点で imiki が見られず、また反対に imiki が用いられている地点で emuyke が見られないことからも、emuyke という語彙が樺太内部で独自に発展し、さらに西海岸南部では imiki~emike という語形に変化したことが予想される。【物語】において emiike が 1 例出現するが、emuyke は 70 例出現しているため、emuyke が基本形だと考えられる。それに対し西海岸南部の imiki, emike は常にこの形で現れる。imike, emike は、emuyke と起源を同じくすると思われるが、emuyke と同じ 4 モーラ[11]の imiiki, emiike ではない理由は今のところ不明である。

服部･知里（1960）によれば、北海道において「みんな」は epitta（八雲・長万部）、opitta（八雲・幌別・平取･貫気別・新冠・様似・帯広・旭川・名寄・宗谷）、oputta（釧路・美幌）であり、樺太においては emuyke（落帆、真岡、白浦、ライチシカ、内路）、imiki（多蘭泊･真岡）である。北海道と樺太の間に断層が感じられる。ただ、樺太では北海道の opitta に対応する語形 opista が少ないながらも確認できるので[12]、かつては樺太･北海道の両方に opitta 系の語彙が分布していたと考えられる。アイヌ語が北海道と樺太に分岐してから、樺太で emuyke 系の語彙が出現したことが示唆される。

また、【方言辞典】によれば、北海道の多くの方言で全部を表す語彙（opitta~oputta）と全体を表す語彙（epitta）が区別されている[13]のに対し、樺太ではどちらの場合も emuyke や imiki が使われている。本稿のテキストの 8, 18 行目でも全部と全体のどちらも imiki で表されている。同じことは樺太東海岸のテキストでも確認できる〔浦田(編) 1998:265, 267 ;【物語】171〕。北海道内でも八雲でこの区別がないようである。八雲では opitta が確認できず、他方言で opitta が出現するところで epitta が出現する[14]。例えば、「二つとも取った」を八雲では túppis 'epítta ku'úk と言うのに対し､名寄では tup 'opítta ku'úk と言う〔【方言辞典】326、下線は筆者〕。また、「一日中」は八雲で sineto epitta であるが、同じことを表すのに幌別・沙流・旭川・名寄でも共通して epitta が用いられており（宗谷では to mútkanne、樺太ライチシカで sinetoo muhkanne, to'emuhkanne）〔【方言辞典】250〕、北海道では八雲でのみ、全部と全体が区別されていないと言える。樺太と北海道の八雲という離れた地域で全体と全部の区別がなされていないということからは、アイヌ語が樺太と北海道に分岐した後、北

---

[11] 樺太アイヌ語の音節構造に関しては服部（1967）参照。同じような例として suunin「青い」がある。「青い」として山田ハヨ氏は suunin を挙げているが〔北原(編)2003:187〕、他地域で見られる siwnin から suunin に変化した（iw→uu）と仮定してもモーラ数は変わっていない。

[12] 【物語】本文に対する語彙の位置づけである金田一（1913:48）に「obishta,〔副〕ミンナ，全部，悉ク.」が見られる（ただし、【物語】本文ではこの語は確認できない）。そのほか【辞典】でも「Opísta.（副）いたるところで。日本語による歪曲 : すべて。Opísta ikù, アイヌ語の言い回し : emújki ikù,「全部飲み干す」の代わり」〔【辞典】228〕とある。なお、荻原(解説)・丹菊(翻刻･訳註)（2001）に収録の千徳太郎治（樺太東海岸の内淵出身）自筆のアイヌ語の手紙には、他の資料に見られる emuyke は 2 例しか確認できないのに対し、opista が 19 例使われている。

[13] 宗谷では opitta のみで epitta が見られない。しかし、宗谷で「一日中」は to mútkanne なので、別の語彙で全部と全体を区別している可能性がある。なお、樺太ライチシカでも似た語彙を用い、「一日中」を sinetoo muhkanne と表現する〔【方言辞典】326〕。他の資料では muhkanne を確認できていない。

[14] 【方言辞典】に epitta が確認できる〔【方言辞典】156, 267, 268, 300, 302, 326〕。

海道で両者の区別が生まれ、北海道内で opitta と epitta が拡がっていく中で八雲が改新から取り残されたことが推測される。

以上では二つの語彙のみを取り上げたが、この二つの語彙からは樺太内部での西海岸南部の際立ちを読み取ることが出来る。ok(~h)kaw は北海道・樺太全体で語根を共通にもつ語彙であるが、imiki, emike のように樺太内でしか語根を共通に持たない語彙もある。特に imiki, emike からは北海道と樺太の間の方言的距離の大きさ、かつ樺太内部における西海岸南部の特異性が感じられる[15]。特に樺太と北海道の間には語形だけでなく、意味の違いがあるという点も注目に値する。なお、多蘭泊・真岡など西海岸南部を区分するのは Asai（1974）や Lee and Hasegawa（2013）の分析結果[16]に近く、知里（1973 [1955]）や小野（2015）を始めとした樺太東海岸方言と樺太西海岸方言に区分するという見方とは異なっている。

なお、知里氏の著作には白主の語彙が掲載されているが、それは山田ナヨ氏の語彙である可能性が大きい（【人間編】52, 479, 482, 492, 493, 496, 500, 502, 503, 505, 510、【動物編】120, 127、【植物編】19, 68, 81, 113, 191, 232, 252）。【人間編】【動物編】に収録されている語彙は「13. 海猫娘をさらふ」に関連した親族や海産物に関するものが多い印象を受ける。【地名】の「setonke【K(シラヌシ)】中段; 中腹。pes-～ がけの中段」〔【地名】118〕も「13. 海猫娘をさらふ」にある「断崖の中腹」〔知里 1973[1944]:286〕だと思われる。知里氏による物語の話者紹介や辞書の記述から、知里氏は山田ナヨ氏のアイヌ語を白主の言葉だと考えていたようである。山田ハヨ氏の記録にも「hacá お父さん（ノトロの方の言葉）」〔北原(編)2003:186〕というように、白主に近い能登路の言葉も報告されているのは興味深い。

5. 関連する文化的情報

カワウソに襲われるという話は管見の限り見あたらないが、テン猟に行ってヤマネコにおそわれるという話が記録されている〔Ohnuki-Tierney1974:22-23 ;【研究資料】114-116[17]〕。

この物語は ka'amace に泊まった時に起こっているが、ka'amace に関しては知里・山本（1973）が詳しい。知里・山本（1973:196-197）によれば、10 月の中頃から、11 月中旬までテン捕りが行われるが、テン獲りの罠を見回る際に泊まる狩小屋が ka-ama-cise[18]「罠を・置く・家」だという。テン猟の際には、罠を 10 個程用意して山に入り、小川の上に丸木を橋のように倒して、その上に罠を仕掛ける（これを ka-ama「罠を・おく」という）が、罠の見回りは、山中の川ぶちに設けたこの狩小屋に泊って行う。

狩小屋の構造に関しては、「8, 9 尺角の大きさで、周囲を高さ 2, 3 尺に丸太をもつて校倉に囲む。前後に柱を建て、これに桁を渡して、この桁へ割板を合掌に置き並べて屋根としたものである。室は土間で、中央に四角い炉を切る。床には草を敷いてここで寝る」〔知里 1973: 196-197〕ものだという。

---

[15] 樺太西海岸北部ライチシカ方言の話者である藤山ハル氏によれば「真岡・多蘭泊のことばは非常に違うけれど、わかる」〔【方言辞典】15〕という（藤山氏は多蘭泊にも居住していたことがある）。

[16] 樺太に関して Asai（1974）は、North Sakhalin（内路）、Central Sakhalin（落帆、真岡、白浦、ライチシカ）、South Sakhalin（多蘭泊）に分類している。ただし、多蘭泊と真岡は同じ方言区分に入れられていない。

[17] 日本語訳には知里（1973[1944]:327）、北海道ウタリ協会札幌支部アイヌ語勉強会(訳)（1992）がある。

[18] 知里（1973[1944]:350）は「チセの形が崩れて『チエ』となり、更に『チェ』ともなって西海岸に使はれてゐる」と指摘しているので、ka'amace は ka'amacise と同じものと考えられる。

6. 表記について

長音記号が付いたものは母音字を重ねて表記する。č は c に置き換えた。名詞の所属形で-h で終わっているものは母音を[ ]で補ったが、これは最後の母音が無声化していることを表しているのかもしれない。行は区切りのいいところで行変えをした。本テキストにおけるローマ字音韻表記は基本的に服部(編)(1964:34)に基づく。母音音素は 5 つ/a, i, u, e, o/、子音音素は 12 個/p, t, k, c [tɕ], s [s~ɕ], r [ɾ~ɽ], m, n, w, y [j], h [h_a,e,o, ɸ_u, ç_i], ' [ʔ]/である。音節頭には全ての子音が立つが、本稿で扱う方言で音節末に立つ子音は/p, t, k, s, m, n, w, y, h/の 9 つであると考えられる。なお、必要がないかぎり、声門閉鎖音/' /を省略している。

服部・知里（1960）から多蘭泊では音節末の/p, t, k/が/h/にならず保持されていることが分かるが、本テキストでも同じような傾向が見られるため、できる限り元の表記を生かし -p, -t, -k は原文のままにしてある。語形の推定に際し、一部母音を補っている。例えば、条件的接続を示す語に neanpe と nanpe の二つの形があるが、使い分けが見られないので（例：sutoono te nukara neanpe「夜が明けて見ると」、cotca nanpe「射ると」）グロスをつける際には n[e]anpe とし、表記から直接導けないものを[ ]で囲って補充した。

7. テキスト：「カワウソのばけもの」

(1)

Esaman　carahau　18 22/5

esaman　carahaw

カワウソ　チャラハウ

カワウソのチャラハウ　昭和 18 年 5 月 22 日

(2)

usoro[19]　otta　tu-oruwan[20]　okkau　an　manu

Usoro　otta　tu-uruwan(?)　okkaw　an　manu

ウソロ　に　二人の-兄弟　男　いる.SG　VP

ウソロに二人兄弟の男がいたとさ。

(3)

sine anpa　nuso　ō　te　arutoro[21]　onne (cū ka)　sirukunne[22]　te

sine-an-pa　nuso　oo　te　arutoro　onne (cuhka)　siri-kunne(?) te

1 つ-ある.SG-年　犬ぞり　乗る　CONP　東海岸　へ　(東)　あたり-暗い　CONP

ある年、犬ぞりに乗って東海岸へ（東へ）（行った。）日が暮れて

---

[19] Usoro：usoro は「湾; 湾内」〔【地名】139〕の意味だが、西海岸北部の鵜城を指していると思われる。

[20] tuoruwan は類例がない。原ノートの書き込みには「oruwaxne 兄弟姉妹」「urúŭaxne」とある。「uruwax (k-i)〔u-ru-wax ウるワハ〕《シラヌシ, マオカ》兄弟; 姉妹」〔【人間編】500〕。

[21] arutoro：「ar-utor, -o アるトル【H 南】山向うの地；反対側の地。[ar(他方の),utor(側面)]」〔【地名】346〕

[22] sirikunne の可能性もあるが、服部・知里（1960:329）に「暗い」として sirukunne（多蘭泊・真岡）があるのでここでも sirukunne とした。北原(編)（2003:182）には山田ハヨ氏の言葉として sirkunne が、村崎（1976:6,210）には真岡方言として sir kunne が出ている。

(4)
kaama ce otta reusi. annosike hemata hauhe oromosu[23] nanpe,
ka-ama-ce otta rewsi. annosike hemata haw-he oromos-u n[e]anpe,
罠-置く-小屋 に 泊まる 夜中 何かの 声-POSS 目覚める-NOM CONP
貂とり小屋に泊まった。夜中に何かの声で目が覚めた。

(5)
hemata osíkepihe[24] sine síkorope sikih[25]
hemata osikep-ihe sine si[s]-koro-pe sik-ih[i]
何の 化物-POSS(?) 1つ 目-を持つ-NOM 目-POSS
何の化物か、一つ目のものの目が、

(6)
siné kepih[26] sianno[27] too nono
si[s] nikep-ih[i] sianno toonono
目 光-POSS 非常に 明るく
目の光が、ぎらぎら光っていて

(7)
sianno wen poro ehke[28] kianne okkau[29] raike te e.
sianno wen-poro. eh ke ki(y)anne-okkaw rayke te e
非常に EMP-大きい 来る CONP 年上の-男 殺す CONP 食べる
とても大きかった。（その化物が）来て兄を殺して食べた。

---

[23] 【研究資料】に oromos が出現する〔【研究資料】115, 239〕。村崎（1976:177）にあるように neanpe の前には、動詞に hV（V は母音）を付加した名詞形がくるので、ここの-u(hu)も名詞化の機能を持つと思われる。【物語】にも an=nukara-ha neanpe（1SG.S=見る-NOM CONP）〔【物語】106〕という例がある。
[24] 原ノートに「oyasi 何んだか」とある。はじめは osíkehu と書かれていたとある。
[25] 樺太方言では名詞の所属形には数の範疇があり、複数標識-(a)hsin（-(a)hcin）が付加されないかぎり「単数」を表す〔服部 1961:7〕。一つ目の化物の目なので-(a)hsin が付加されていないと考えられる。
[26] 原ノートではこの語の下に「six nikepih 目 光る」とある。
[27] sianno :「si'anno (adv)〔マ（註—真岡のこと）〕本当に、全く」〔村崎 1976:206〕;「とても難しい。si’ánno hokámpa」〔北原(編)2003:187〕。
[28] 知里（1953:210）の多蘭泊の物語にも ike ではなく ke という接続助詞が見られる。
[29] ki(y)anne-ohkaw :「keyanne-oxkao《シラヌシ》兄。[keyanne (年長の) + oxkao (男)]。」〔【人間編】503〕。

(8)

nean pe　kusu　omanike　anih[30]　nuso　setax　imiki[31]　erāppika[32]
nean-pe　kusu　oman　ike　anih[i]　nuso　seta-h[a]　imiki　erapika(?),
その-NOM　CONP　行く.SG　CONP　彼　犬ぞり　犬-POSS　全て　放す(?)
そのため、逃げて彼は犬ぞりから犬をすべて放した。

(9)

seta　ora[33]　kopiuke[34]　kimun　ni[35]　kira.
seta　ora　kopiwke　kimun　ne (?)　kira.
犬　から　を攻める　山　へ　逃げる
（化物は）犬に追われて山に逃げた。

(10)

sinkekeh　anih　otakata　san　te　eairap[36]
sinkeke-h[e]　anih[i]　otaka　ta　san　te　eayrap
次の日-POSS　PRON.3SG　浜　に　下りる.SG　CONP　物語る
その翌日、彼は浜へ下りて（そこの人々に）物語った。

---

[30] 原ノートにはこの語の下に「自分」とある。三人称単数代名詞だと思われる〔知里 1973[1942]: 547〕。

[31] 第 4 節「語彙的な特徴について」参照。この行の下に「orāu čipika ハナシタ」とある。直後の erāppika と同様の意味を表すと思われるが、oraawcipika は樺太アイヌ語の音節構造としては問題があるので（rā は ra が高く発音されることを反映しているのかもしれない）、ここでは orawcipika としておく。類例は見当たらないが、8 行目の erāppika と pika の部分が共通し、pika が「放す」を意味する形態素かとも思われる。それとも o-「～から」raw「下(に)」cipi(<pici)「放す」-ka「させる」＞orawcipika「～から～を下に離す」だろうか？

[32] 原ノートに「放した（首から綱を脱してやる―しばってあるものを）」と記されている。関連すると思われる語に「Erápiru.（動）解き放す、（犬を）橇からはずす」〔【辞典】464〕がある。原文の転写である eraappika は樺太アイヌ語の音節構造としては問題があるので、ここでは註 31 を参考に erawpika としておく。e-「～を」ra(w)「下(に)」pika「放す」だろうか。註 31 参照。

[33] 動作主を表す orowa が縮約して ora になったものだと思われる。なお、樺太方言では oro だけでも起点を表すことができる〔知里 1973[1942]:579〕。

[34] kopiwke :「～を攻める、攻撃する、～にとびかかる」〔村崎 1976:167〕。なお、ここの kopiwke の前にあった in は棒線で抹消されているようだが、一人称目的格人称接辞 in- だった可能性がある。受動文では通常、動詞に不定人称の人称接辞 an- が付加されるが、動作主が oro(wa)で表されているにもかかわらず動詞に an- が付加されないものもしばしば見られる〔【物語】98, 136 ほか〕。

[35] 「’ehanke tokone（近いとこへ）」「ota kane（浜へ）」〔北原 2003:178,181〕は ehanke toko ne「～に近い・所・へ」、otaka ne「浜・へ」だと思われるが、ここの ni も向格助詞の ne だと思われる。

[36] 宗谷や名寄で yayrap(pe)「昔話」が記録されている。eairap は e-yayrap「～を」「語る」の可能性がある。

(11)
naora ainu renkai[37] makan[38] te na ukuran kotōno[39] koro[40] nanpe.
n[e]a ora aynu renkay makan te n[e]a ukuran kotoono koro n[e]anpe.
それ から 人 大勢 のぼる.SG CONP その 晩 夜通し する(?) CONP
それから人々は大勢山へ行ってその夜は夜通し起きている(？)と

(12)
neanpe sui san. ota ka makan uta op ku na [欄外 koasite]
nean-pe suy san. otaka (wa?) makan uta op ku na koasi te
その-NOM また 下る.SG 浜 (から?) 山へ行く.SG 人々 槍 弓 も 持つ CONP
そいつ（＝化物）がまたやってきた。浜から山に来た者たちは槍や弓を持って

(13)
nean-pe konun[41] rewere[42] te ai onne sikux[43] nōri[44] te cuca[45]
nean-pe konun rewere te ay onne sik-uh[u] noore te cu[h]ca (cotca?)
その-NOM 攻める かかる CONP 矢 で 目-POSS 狙う CONP 射る
そいつを攻めたてて、矢でその目を狙って射た。

(14)
cotca nanpe rai manu.
cotca n[e]anpe ray manu.
射る CONP 死ぬ VP
射ると（そいつは）死んだとさ。

(15)
sutō note[46] nukara neanpe wen poro Esaman,
si[s]-toono te nukara neanpe[47] wen-poro esaman
あたり-明るい CONP 見る CONP EMP-大きい カワウソ
夜が明けて、見るととても大きなカワウソが、

---

[37] renkay は服部・知里（1960:314(38)）にある renkayne（多蘭泊,真岡,ライチシカ）に似たものだろう。
[38] 複数形の makap(~h) でないのは renkay で人が大勢いることが明らかになっているからだと思われる。
[39] 原ノートに「通夜」とある。
[40] 原ノートに「した」とある。
[41] 原ノートに「せめた」と書き込みがある。
[42] 原ノートに「カゝツタ」とあり、「komunisanke カゝツタ」ともある。
[43] sikihi? 5 行目には sikix とある。sik「目」の所属形に sik-ihi と sik-uhu 二つの語形がある可能性がある。
[44] 原ノートの書き込みに「nóre ネラフ」とある。【物語】に tehpo ani i-noore-hsi「銃を構へて差し向けられた」（銃・で・1PL.O-狙う-PL）〔【物語】110〕とある。
[45] 次の行では cotca となっている。
[46] 山田ハヨ氏によれば「sitó:no 夜明けた」〔北原(編)2003:182〕。
[47] 指示代名詞としても解釈できるが、知里（1955:209）の「見ると」に従い、接続助詞と解釈した。

(16)
hemppa huwan[48] pa ka an wen poro Esaman
hempah wan pa ka an wen-poro esaman
いくつ 十 年 も いる.SG EMP-大きい カワウソ
何十年も生きたとても大きなカワウソが

(17)
wen poro hekai Esaman
wen-poro hekay esaman
EMP-大きい 年を取った カワウソ
とても大きく年を取ったカワウソが

(18)
herutonto kahne ne 〔欄外 nitōpāki-imi-ki[49]〕
heru tontokah ne ne 〔nitoopaaki imiki〕
ただ なめし皮 COP その(?) 体 全体
すっかり（すりきれて）なめし皮のようで、その体一面に

(19)
anpeni rokocikopoe makiri ka poso han ki.
anpeni roko[50] cikopo(y)e[51] makiri ka poso han ki.
本当に 松脂 つく(?) 小刀 も 通る NEG する
松脂がついていて小刀も通らなかった。

(20)
(nahkanne.) ― hemaka ―
(nahkanne[52].) hemaka
このように 終わり
このような（お話） おしまい

---

[48] 原ノートでは、この語の下に「hempax wan pa 何十年」と記されている。
[49] nitoopaaki-imi-ki は体中だと思われるが、樺太では北海道の多くの方言と異なり、全体と区別はなく、どちらも imiki や emuyke が使われている。第 4 節「語彙的な特徴について」参照。
[50] 原ノートに「rokó 松脂」と記されている。「tuko n. 松脂（樺太）」〔【久保寺辞典】280〕。樺太では r が語頭に立つとき t に近く発音される傾向がある。
[51] ci-kopeye＜ci-「自ら」ko-「～に」poye「塗りつける」かと思われる。参考 :「塗りつける ; 塗る。 kopoye(色・泥を) ; 'usi'usi(うるしを)」〔ライチシカ【方言辞典】147〕。
[52] nahkanne :「nah-kāne,〔副〕カヨウニ、カク、コンナ風ニ、コノ位ニ」〔金田一 1913:47〕。

略号一覧

1, 2, 3	1, 2, 3 人称	COP	繋辞	POSS	所属形
NEG	否定	EMP	強調	PRON	人称代名詞
APPL	充当接頭辞	NEG	否定	Q	疑問
SG	単数	NOM	名詞化	S	主格
CAUS	使役	PL	複数	TOP	主題
CONP	接続助詞	O	目的格	VP	助動詞

謝辞

本稿の執筆にあたり、不明な語彙の解釈に関して意見を下さった北原次郎太先生や佐藤知己先生に深く感謝を申し上げます。また、お二人の匿名の査読の先生方から、たいへん丁寧で有益なご指摘とご意見を頂きました。心よりお礼申し上げます。

出典略称

【久保寺辞典】: 北海道教育庁生涯学習部生涯学習部文化課(編)（2007）
【研究資料】: Piłsudski, B.（1912）　【動物編】: 知里（1976 [1962]）
【辞典】: Dobrotvorskij, M.M. (1875)【人間編】: 知里（1975 [1954]）
【植物編】: 知里（1976 [1953]）　【方言辞典】: 服部(編)（1964）
【地名】: 知里（1973 [1956]）　【物語】: 山邊(著)・金田一(編)（1913）

参考文献

Asai, Tôru（1974）Classification of dialects: cluster analysis of Ainu dialects. *Bulltein of the Institutefor the Study of North Eurosian Cultures*, 8:45-136.

Dobrotvorskij, M.M.（1875）*Ainsko-Russkij Slovar'*, Kazan.

Lee, Sean and Hasegawa Toshikazu（2013）Evolution of the Ainu Language in Space and Time. *PLOS ONE*, 8(4): 1-6.

Ohnuki-Tierney, Emiko（1974）*The Ainu of the Northwest Coast of Southern Sakhalin*. Holt, Rinehart and Winston, Inc.

Piłsudski, B.（1912）*Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore*. Cracow.

浦田遊(編)（1998）『アイヌ・モシリ― 幻のアイヌ語誌復刊』釧路アイヌ文化懇話会.

荻原眞子(解説)・丹菊逸治(翻刻･訳注)（2001）「千徳太郎治のピウスツキ宛書簡―「ニシパへのキリル文字の手紙」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』4: 187-226.

小野洋平（2015）「『数量化 3 類クラスタリング』の有効性について」アンア・ブガエワ・長崎郁(編)『アイヌ語研究の諸問題』61-72. 札幌：北海道出版企画センター.

北原次郎太(編)（2003）「アイヌ語樺太方言の資料―田村すず子採録 山田ハヨさんの語彙と口頭文芸―」北原次郎太ほか(編)『アイヌ語樺太・名寄・釧路方言の資料』ELPR 成果報告書 A2-039: 170-201. 吹田：大阪学院大学情報学部.

北原次郎太（2009）「樺太西海岸多蘭泊の hawki『海馬嫁』のテキスト」『itahcara』6:49-68.

金田一京助（1913）「あいぬ物語附録 樺太アイヌ語大要・樺太アイヌ語彙」山邊安之助(著)・

金田一京助(編)『あいぬ物語 附あいぬ語大要及語彙』博文館.
丹菊逸治（2001）「サハリンアイヌ散文説話の一ジャンル tuytah について」村崎恭子(編)『少数民族言語資料の記録と保存―樺太アイヌ語とニヴフ語―』ELPR 成果報告書 A2-009: 69-90. 吹田：大阪学院大学情報学部.
知里真志保（1953）「樺太アイヌの神謡」『北方文化研究報告』8: 185-240.
知里真志保（1955）『アイヌ文學』東京：元々社（表紙に掲載の著者名は智里眞志保）.
知里真志保（1973 [1942]）「アイヌ語法研究―樺太方言を中心として―」『知里真志保著作集』3: 455-586. 東京：平凡社.
知里真志保（1973 [1944]）「樺太アイヌの説話」『知里真志保著作集』1:251-372. 東京：平凡社.
知里真志保（1973 [1955]）「アイヌ Ainu」『知里真志保著作集』3: 231-244. 東京：平凡社.
知里真志保（1973 [1956]）「地名アイヌ語小辞典」『知里真志保著作集』3: 335-454. 東京：平凡社.
知里真志保（1973 [1961]）「えぞおばけ列伝」『知里真志保著作集』2: 369-413. 東京：平凡社.
知里真志保（1975 [1954]）『分類アイヌ語辞典 人間編』東京：平凡社.
知里真志保（1976 [1953, 1962]）『分類アイヌ語辞典 植物編・動物編』東京：平凡社.
知里真志保･山本祐弘(1973)「樺太アイヌの生活」『知里真志保著作集』3:145-209.東京:平凡社.
服部四郎（1961）「アイヌ語カラフト方言の『人称接辞』について」『言語研究』39: 1-20.
服部四郎(編)（1964）『アイヌ語方言辞典』東京：岩波書店.
服部四郎（1967）「アイヌ語の音韻構造とアクセント―アイヌ祖語再構の一試み―」『音声の研究』13: 207-223.
服部四郎・知里真志保（1960）「アイヌ語諸方言の基礎語彙統計学的研究」『民族学研究』24: 307-342.
藤山ハル(口述)・村崎恭子(編)（2010）『樺太アイヌの民話（ウチャシクマ）―ウェネネカイペ物語（3 編）―』府中：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
北海道ウタリ協会札幌支部アイヌ語勉強会(訳)（1992）「B･ピウスツキ／樺太アイヌの言語と民話についての研究資料＜30･完＞」『創造の世界』84: 136-145.
北海道教育庁生涯学習部生涯学習部文化課(編)（1992）『平成 3 年度 久保寺逸彦 アイヌ語収録ノート調査報告書（久保寺逸彦編 アイヌ語・日本語辞典稿）』札幌：北海道教育委員会.
北海道教育庁生涯学習部文化課(編)（2002）『平成 13 年度 知里真志保フィールドノート(1)』札幌：北海道教育委員会.
村崎恭子（1976）『カラフトアイヌ語』東京：国書刊行会.
山邊安之助(著)･金田一京助(編) (1913)『あいぬ物語 附あいぬ語大要及語彙』東京：博文館.

Ainu Text in Southwest-Sakhalin Dialect (1): The One-eyed River Otter

Ryo SAKAGUCHI
(Graduate School of Humanities and Social Sciences, Chiba University)

This paper aims to present a text of the Southwest-Sakhalin Dialect of Ainu. This is a folktale called "*Carahaw*" in their genre of folklore. The text has already been translated into Japanese by Prof. Mashiho CHIRI (1909-1961). The original Ainu text was extracted from "CHIRI Mashiho's Field Note (1)" (published by Hokkaido Prefectural Board of Education, 2002), which contain Mr. Kotarō SASAKI (1923-1965)'s field notes of a recording of the tale thought to have been recited by Ms. Nayo YAMADA (?-?) in Tarantomari, Sakhalin in 1943. A version of the text romanized by the currently used method and a Japanese translation are also presented.

The one-eyed river otter

There were two brothers living in a settlement of Usoro. One day they made for the east coast of Sakhalin on a sled pulled by dogs. On the way, they stayed at a hut used by Ainu people when hunting marten. In the middle of the night, the younger brother woke up at a strange sound, looked around, the elder brother was being eaten by a one-eyed monster. He was frightened and ran out and unleashed the sled dogs. The monster was chased by the dogs, and darted off to a mountain.

The next day the younger brother went to the nearby village to tell the people what had happened in the mountain. The men of the beach went to the mountain to kill it. In the night, the monster appeared again, and the men fought it with bows and spears, and killed it. At daybreak, all the people realized that the monster was an extravagantly large and old river-otter. Its skin was like a tanned leather and covered with pine resin. The skin was too hard to be pierced by a knife.

（さかぐち・りょう　adua1366@chiba-u.jp）